

高崎まちなかオープンカフェ (高カフェ)の取り組み

高崎市 商工観光部 産業政策課

1 高崎市の概要

高崎市は、群馬県南部のほぼ中央に位置し、東は埼玉県、西は長野県に接する約460平方キロメートルの市域を持つ、人口約37万人の中核市で、関東平野に形成される市街地から榛名山まで、都市と自然が調和したバランスの取れた都市です。

また、「高崎」は古くから交通の要衝であり、江戸時代には商人でにぎわう中山道随一の宿場として栄え、明治の近代化とともに東京と鉄道で結ばれました。現在では、関越・上信越・北関東の3本の高速自動車道、上越・北陸（長野）の2本の新幹線、高崎線などのJR在来線5本が結節する国内有数の交通拠点として成長を続けています。

さらに、北陸新幹線の金沢延伸や関越自動車道の高崎・玉村スマートインターチェンジの整備を中心に、本市の交通拠点性がますます加速する中で、企業誘致や雇用拡大を図る施策の充実や人々の交流の拠点となる新たな都市集客施設、新体育館、群馬県コンベンション施設の整備など、北陸・上信越と首都圏を結ぶ中心都市として飛躍するために様々なプロジェクトが進行しています。



高速交通の十字軸

2 中心市街地の特長と戦略

本市の中心市街地は、1598年、井伊直政が箕輪城（高崎市箕郷町）を現在の市役所付近に移したことにはじまり、賑わいのある宿場町、城下町として、また、生糸などの交易が活発な商都として発展してきました。

近代に入り、鉄道や道路の結節点として、その交通拠点性を生かした商業都市としての性格が強まり、1960年代以降には、中心市街地にデパートが立地するなど商業集積が高まりました。こうした中、中心市街地は、土地区画整理事業や市街地再開発事業などを積極的に行い、都市基盤のさらなる充実を図りました。近年では、少子高齢化により人口が減少する社会構造の中、民間のマンション建設などにより人口は増加しています。

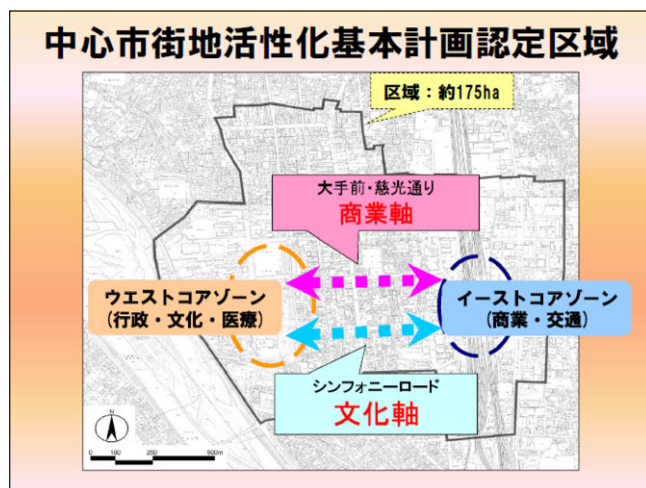
また、市内外を問わず多くの人々が参加する文化活動やイベントが数多く開催されていることも特長の1つです。中でも、戦後の混乱期に市民の力を結集して結成された「群馬交響楽団」や、群馬交響楽団の本拠地として建設費の3分の1を市民の寄付で賄い建設された「群馬音楽センター」は、高崎市民の文化の象徴として多くの人から愛されています。

さらに、中心市街地には、市役所、中央図書館、シティギャラリー、高崎市美術館、高崎市タワー美術館、群馬シンフォニーホール、国立病院機構高崎総合医療センター、高崎郵便局などの公共公益施設が集中して立地しており、中心市街地の核となっています。

さて、モータリゼーションの進展に伴う、商業・業務機能の郊外化が顕著になり、相対的に活力が低下していると言われる中心市街地ですが、本市においても郊外の幹線道路にロードサイド型の大型店が立地し、全国の都市と共通の課題を抱えています。中心市街地はまちの「顔」であり、「品格」を表すものです。企業が地方に進出する際には、中心市街地に多くの人が歩いていることが重要なファクターになるとも言われています。本市では、都市にとって大切な中心市街地の活力を向上させるため、様々な施策を講じ、積極的に活性化に取り組んできました。

平成20年11月には、高崎の活力と新しい文化を創造・発信する“賑わい・交流・文化都心”を基本理念とした、「高崎市中心市街地活性化基本計画」の認定を受け、楽しく歩いて回遊できるコンパクトな中心市街地の形成を目指し、2つのコアゾーンと2本の都市軸を中心に活性化の効果が中心市街地全体に波及するよう、まちづくりを戦略的に進めています。

市役所、群馬音楽センター、城址公園、もてなし広場、中央図書館、総合保健センターなど、多くの市民が利用する公益施設が集積した「行政・文化・医療機能のコアゾーン」をウエスト・コアゾーンとし、また、高崎駅を中心とした大型商業施設や店舗・飲食店が集積するとともに、ペDESTリアンデッキや複合交通ターミナルが整備された「商業・交通機能のコアゾーン」をイースト・コアゾーンとしています。これら2つのコアゾーンを結ぶ東西方向の都市軸として、シンフォニーロード(JR高崎駅と市役所周辺を結ぶ道路)を「文化軸」、大手前・慈光通り(高崎高島屋とスズラン百貨店を結ぶ道路)を「商業軸」と位置づけ、2つの都市軸の機能を強化し、人・もの・情報の流動を促進しています。



中心市街地活性化の戦略イメージ

3 オープンカフェ実施の背景

高崎市中心市街地活性化基本計画に基づき、施策を推進していく中で、平成23年秋に都市再生特別措置法の一部が改正され、道路占用許可の特例制度が創設されました。法改正以前には、道路の敷地外に余地がなく、やむを得ない場合(無余地性)で、かつ、一定の基準に適合していなければ道路の占用は許可されませんでした。しかし、特例制度創設後は、まちの賑わい創出に繋がり、特例条件を満たす事業であれば、歩道上にオープンカフェなどの食事施設を設置することが認められるようになりました。

高崎市と高崎商工会議所では、この制度にいち早く着目し、中心市街地の新たな賑わいの創出や回遊性の



道路管理者、交通管理者による現地調査

向上を図ることを目的に、実施に向けた検討を重ねてきました。

全国的に事例も少なく、手探り状態で行き始めましたが、検討の場では、国土交通省高崎河川国道事務所、群馬県都市計画課、群馬県道路管理課、群馬県高崎土木事務所、群馬県警察本部、高崎警察署など、多くの関係機関から実践的な意見やアドバイスをいただきました。その結果、特例制度を活用するには、まず社会実験を行い、様々な事案を検証することが必要であるとの結論に至りました。

4 協議会の結成と社会実験

社会実験に先立ち、平成24年7月に事業の運営主体となる「高崎まちなかオープンカフェ推進協議会」を結成しました。この協議会の委員は、高崎市と高崎商工会議所のほか、中心市街地の商店街団体や料理飲食業団体の関係者、実際に出店する店主などで構成し、事務局は、高崎商工会議所に置いています。

協議会では、社会実験を平成24年9月の1ヶ月間に実施することとし、主な検証事項として、テーブルやイスなどの占用物件の設置位置や安全性、人の動線との関係、店の集客や回遊性の向上などの効果を計ることとしました。実施区域は、2つのコアゾーンを結ぶ東西方向の都市軸「シンフォニーロード」と「大手前・慈光通り」に囲まれたエリアとし、事業の中心的な役割を果たす実施店舗は、この沿線の1階にあるカフェやレストランなどで、店先の歩道に十分な幅員を確保できる10店舗を協議会で任意に選定しました。また、協議会には選定された出店者による出店者部会を設け、既存の枠組みを超えた新たな企画の発案にも期待したところ、実際に出店者からの提案で、オープンスペースを利用したお客様に対し5パーセントオフで飲食物を提供するなど、新たな連携企画も生まれました。その他、出店のルールとして、営業時間は午前8時から午後8時の枠の中で各店舗が自ら設定すること、喫茶、軽食を中心としたメニュー構成にすること、協議会が規定する許可基準等を遵守することなどを決めました。



出店者部会での協議風景

選定した10店舗は、早く社会実験に出店していただけることとなりましたが、出店者には、協議会長に出店申込書を提出して承諾を得た上で出店していただきました。申し込み手続きの際に、協議会から出店者に対して出店ルールなどの説明を行い、今回のオープンカフェは、単なる営業活動に留まらず、まちなかの賑わい創出が第一義的な目的であることをお願いしました。

また、道路上にテーブル、イスなどを設置するために必要となる道路占用と道路使用の許可申請は、各店舗ではなく、協議会長が申請者となってこれを行い、許可手数料については、道路占用料、道路使用料ともに協議会が負担しました。申請手続きに伴う案件については、道路管理者の群馬県と高崎市、交通管理者である群馬県公安委員会と、それぞれ協議を重ねた上で決定しました。

社会実験で苦心したことの1つとして、歩道上の視覚障害者誘導用ブロックへの対応が挙げられます。

各店舗前の歩道で、占用に必要な面積を計測した際、テーブル、イスなどの食事施設を設置すると点字ブロックが遮断されるか、歩行に十分な離隔距離が確保できないことが分かりました。このため、協議会の負担で急遽、仮設の点字ブロックを購入し、既存の点字ブロックを迂回させるように敷設して、歩行の妨げにならないよう工夫をしました。

このほかにも、テーブル、イス、パラソルなどが、突風などに耐えられる自重や構造を備えているかなどを懸念する意見もありましたが、実施検証しなければ判断が難しいため、協議会や出店者が最大限の注意を払うことで実験を進めて行くこととなりました。



仮設点字ブロックの敷設 (1)



仮設点字ブロックの敷設 (2)

5 社会実験の結果から

30日間実施した社会実験の結果、歩道上にテーブル、イスなどを設置したことによる通行上の支障を訴える意見はなく、事務局の高崎商工会議所を始め、道路管理者である群馬県と高崎市、交通管理者である警察機関にも苦情が寄せられることはありませんでした。このことから、高崎まちなかオープンカフェは、十分な歩道幅員を確保すれば、道路の占用や使用に関し、問題なく実施できる事業であることが実証されました。

また、実施した10店舗に対して行ったアンケートによると、利用者は家族連れが多く、20歳代から50歳代を中心に、幅広い年齢層の方々が訪れていることがわかりました。お客様の声としては、「犬同伴者や愛煙家でも、屋外だと利用しやすい」、「実施期間を延長してほしい」、「夜8時まででは短すぎる」など、事業に対して前向きな意見を多く得ることができました。一方で、「気候が暑すぎた」、「テーブル、イスはもっと大きい方が寛ぎやすい」など、より快適な空間を提供するための課題も浮かび上がりました。

さらに、出店者からは、「集客の見込みは不透明だが、事業を続けることが活性化には必要だ」という意見もあり、中心市街地の商店経営者の矜持や志の高さを改めて認識することができました。



社会実験の様子 (1)



社会実験の様子 (2)

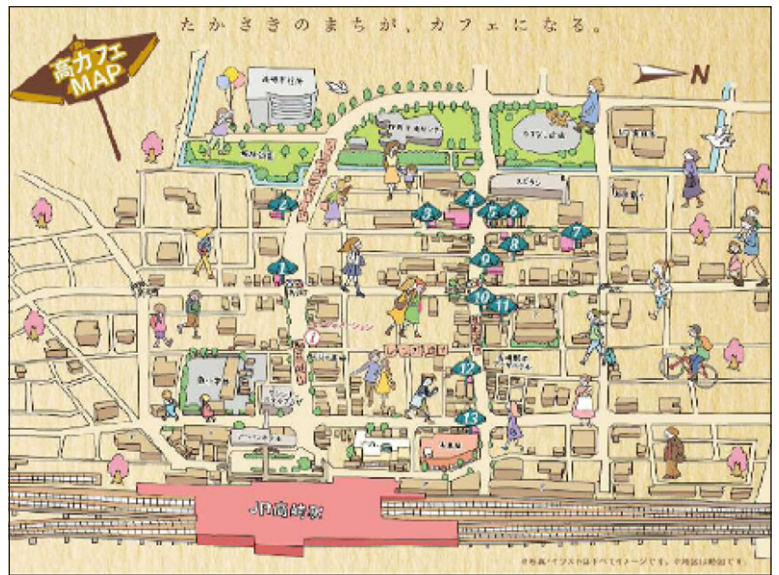
6 オープンカフェの開始 ～高崎のまちがカフェになる～

平成 25 年 4 月 6 日土曜日、「高崎のまちがカフェになる」をスローガンに、高崎まちなかオープンカフェが、社会実験から 3 店舗増えた 13 店舗の出店により、本格的にスタートしました。

社会実験でいただいたお客様や出店者からの意見を参考に、「高カフェマップ」を作成し、オープニングイベントとしてスタンプラリーを行ったほか、ノベルティグッズをプレゼントするなど、様々な企画を行った結果、順調にオープンすることができました。

スタート当初は、オープンスペースで食事をしたり、コーヒーを飲んだりすることに恥ずかしさや人目を気にしていた方もいましたが、人が人を呼び、今では、多くの方にご利用いただいています。

天候に左右されやすく、カフェ文化が定着するまで出店者や協議会の試行錯誤は続くと思われま。しかし、高崎のまちなかのいたる所に開放感あるロケーションでカフェや会話を楽しむ風景、これがまちの自然な風景になったとき、高崎のまちなかに新たな賑わいが創り出されたと確信できることでしょう。



高カフェマップ



オープンカフェの利用風景 (1)



オープンカフェの利用風景 (2)

7 最後に

オープンカフェは、4 月から 11 月まで行っています。本市では、その間、高崎まつりや花火大会、高崎えびす講市など様々なイベントが開催されます。また、東日本一の生産量を誇る梅や梨、桃、プラムなどの果樹をはじめとした農産物も豊富にあります。

ぜひ一度「高崎」にお越しいただき、オープンカフェでまちの匂いを感じていただくとともに、人・物・情報が集まり、元気で賑わいのある「たかさき」の魅力を実感してみてください。